

講演  
採録

## | 骨と血からなる〈非一存在〉

江川 隆男

えがわ たかお

立教大学の現代心理学部映像身体学科に所属している江川と申します。私の専門は、西洋哲学です。とりわけ20世紀のジル・ドゥルーズという哲学者を研究していますが、自分自身、単なる「哲学研究」をするような学者ではなく、「哲学者」になりたいと考えたときに、とくにスピノザとニーチェの哲学が私にとってきわめて大きなものでした。そして、徐々に気づいたことですが、スピノザとニーチェとドゥルーズという一つの系列を展開することに自分の哲学的課題のすべてがあるのではないかと思うようになりました。この課題を一言で言うと、それは、まさに「倫理（エチカ）」です。哲学と言えば、ほとんど人間精神を中心にしていますが、スピノザは哲学に人間身体を本質的に導入した最初の哲学者です。初めて哲学的思考のうちに身体を導入して、精神と身体とはまったく異なるけれども、存在論的には対等であるという衝撃的な考え方——存在の一義性——を提起しました。これは、言い換えると、精神と身体を相互に分離し抽象化して、双方を単独でしか考えないということを徹底的に否定する立場です。精神（イメージや意味や価値、等々）について考えていても、つねにそれに並行する仕方で身体が存在あるいは身体の触発が考えられなければならないでしょう。そして、身体の触発は、第一次的には精神において感情として表現されます。この〈エチカ〉の系列は、この意味において精神と身体との、あるいは精神のアフォーリズムと身体の遠近法主義との、あるいは言表作用の集合作用と身体との機械状作用配列との間の並行論を展開するもっとも強力な哲学的思考だということです。そして、本日のテーマにつながりますが、ドゥルーズがアントナン・アルトーの「器官なき身体」という考え方を取り上げているのをきっかけにして、私はアルトーを知りました。

私は以前に『死の哲学』（2005年）という本を書きましたが、その表紙はスピノザとアルトーが二重写しになっています。死（あるいは不死）をテーマにしたものですが、私にとってスピノザとアルトーは、ほとんど同じ系譜のうちにあります。もちろんそれぞれに恐るべき隔絶した諸特徴があります。しかし、身体につ

いてスピノザが言っていなかった部分を、アルト―によって補完できるという面もあります。あるいは当然のことながら、スピノザにけっして還元されえないようなアルト―の思考というものもあります。そういう観点から私は、21世紀における〈エチカ〉を書こうと努力しています。ちょうど2年前に『アンチ・モラリア』という著作を出版しましたが、そこでも私は、つねにアルト―について考えていました。私は、アルト―を単に学問上の研究対象にしてきたわけではなく、むしろアルト―が問題化していたことを生の問題あるいは実存の様式としていかに哲学的に表現できるのかという仕方でも考え続けてきました。

ところで、哲学においては、その哲学に固有の概念的人物というものが含まれています。例えば、プラトンであれば、ソクラテスはその典型的な概念的人物像に当たります。カントであれば、「市民」あるいは「裁判官」が、マルクスであれば、「労働者」あるいは労働者からプロレタリアートへの生成変化がまさに概念的人物だと言えます。ニーチェだったら、ツァラトゥストラあるいはディオニュソスがそれに値しますね。ドゥルーズだったらどうでしょうか。「ノマド(遊牧民)」という概念的な人物があります。遊牧民だったらどういう風に物を配分するのだろうか、どのように身体が発達しているのだろうか、そういうことから人間を考えたり自然を考えたりするわけです。あるいは「来たるべき民衆」もそうだと思います。では、アルト―の概念的人物とは何か。それは、私にとっては「難民」になります。移民ではありません。しかも、それは、言わば〈絶対的難民〉と称されるべきもののことです。存在上どこにも行くことができず、移動できる場所がこの世界にないような存在者のことです。つまり、絶対的難民とは、存在そのものに対する難民ということです。このことは、アルト―が存在を嫌悪したことで深くつながっています。

さて、本日、お配りした資料は、『アルト―後期集成』の第2巻がようやく今年出て、全3巻が完結しましたが、それに関する私の書評です。今回、出版されたこの『アルト―後期集成』のなかで、とりわけ『手先と責苦』のこの第2巻の翻訳は、画期的だと思います。また第3巻の『カイエ』は、同様に重要なものです。最近、ドゥルーズがフーコーやガタリやクロソウスキーらに送った書簡を集めたものが出版されましたが、そのなかにアンドレ・ベルノルドという文学研究者に送った手紙があります。そこにアルト―についての言及があります。簡単に言うと、ドゥルーズは、はっきりと『ヘリオガバルス』と『カイエ』が最重要であると書いています。アルト―の作品のなかで比類なき仕方で君臨するのは『ヘリオガバ

ルス』であり、また『カイエ』のなかにすべての最終的な理由を見出すことができるという言い方さえしています。あるいは非有機的な生氣が関係づけられるのは『ヘリオガバルス』と『カイエ』の内部だけである、と（『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』）。私は、アルトーについて何かを書く場合、自分の精神のうちに彼の言葉がどのように展開するのかを密かに見守る、そういうことを大事にしたいと思っています。書かれたものの外側に視点を置いて読み解くということでは、アルトーのテキストがもつ意味あるいは非意味は失われてしまいます。映像身体学というのも、実はそういうものだと思います。自分の知性や精神のうちに、自分の意志とは関係なく、その対象が自ずからどのように展開していくのか——それらを静かに見て行く、そして書き取る、あるいは聞き取ること。これは、単なる視点ではなく、視線や遠近法のなかでそれらを知覚するということです。

さて、これから読んでいきたいのは、この「骨と血からなる〈非－存在〉」という表題の私の書評です。骨と血というのは、器官なき身体のことです。しかし、それは、単に存在するものではないんですね。この場合の身体とは、存在に対する抵抗性の身体のことであり、身体のそうした触発あるいは変様のことです。副題は「アントナン・アルトーにおける脱－墓石化の身体」と書いてありますが、これは、墓場に葬られない永遠の身体のことであり、アルトー自身が言っていることです。では、少しずつ読んでいきたいと思います。

\* \* \* \*

## 骨と血からなる〈非－存在〉

### ——アントナン・アルトーにおける脱－墓石化の身体——

『アルトー後期集成Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』宇野邦一・鈴木創士監修、河出書房新社 江川隆男

アントナン・アルトーは、「残酷演劇」を提唱した。では、残酷とは、そもそも何であるのか。おそらくそれは、一つの情動である。残酷とは、スピノザによれば、自分の愛する者あるいは憐れむ者に対して害悪を与えるようにわれわれを駆る欲望のことである（『エチカ』）。つまり、残酷は、人間におけるもっとも本質的なものとしての欲望の一つの特異な在り方なのである。そうだとすれば、アルトーは、いったい何に対してこの「残酷」という情動に刺激されたのであろうか。あるいは、アルトーは、どの

ようにして「残酷」という既知の感情をまったくの未知の情動として提起しようとしたのであろうか。残酷演劇の問題は、おそらく実現可能とか上演不可能とかといった水準にはない。そんなことは、どうでもいいのだ。というのも、残酷演劇は、存在上の実現をまったく問題にしていないからである——残酷演劇、それはむしろ反-実現の欲望である。

宇野邦一氏と鈴木創士氏の二人が監修者となって刊行された『アルト-後期集成』全3巻が、ようやく完結した。世界的に見ても、稀有な集成であることは、間違いない。第1巻と第3巻がともに2007年に、そして残っていた第2巻が今年の3月に出版された。全3巻で1400頁以上になるまさに記念碑的な書物である(訳者による各テキストの「解題」も付されており、読者にとって大きな助けとなる)。アルト-は、1896年生まれで、1948年に51歳で亡くなっている。この後期集成には、アルト-によっておよそ最後の5年間に書かれたテキストが中心に収められている(ただし、1936年のメキシコ旅行中から書かれていた『タラウマラ』が含まれているので、監修者が言うように、この場合の「後期」は、広い意味では、むしろこの「メキシコの旅以降」を意味すると考えた方がよいかもしれない)。

第1巻には、『タラウマラ』、『アルト-ル・モモ』「アンリ・パリゾーへのロデーズからの手紙」「此处に眠る」、等々が収められている。第2巻は、『手先と責苦』の全訳である。第3巻は、「アルト-・モモのほんとうの話」「アンドレ・ブルトンへの手紙」、そして「カイエ1945~1948」からなる。このなかでも、評者がとりわけ画期的だと思うのは、『手先と責苦』と「カイエ1945~1948」(400冊以上に及ぶ、小学生用のノートに書かれた断片的なテキスト群から重要な部分を抜粋したもの)の翻訳であろう。

さて、アルト-がつねに刺激されるのは、存在しない〈事例〉である。というのも、とくに1945年以降のアルト-は、まさに存在を嫌悪して、身体が存在に帰属することに最高の強度を以って抵抗したからである。こうした身体は、墓場に葬られるような身体ではなく、不滅で、不死で、変化する身体である(「演劇と科学」,「魔術にかかると」)。それは、単に存在している身体のことでも、あるいはかつては存在していたが、今ではその〈存在〉が否定され、墓場に葬られて、言わば〈否-存在〉となった身体のことでもない。アルト-が言う「変化」は、或る身体の存在に生起するものでもなければ、或る身体の〈存在〉からその身体の死としての〈否-存

在)への移行のことでもない。「俳優にはこの、身体を移すという役目がある／……／というのも、叫びと、／有機的に、／それに伴う気息は／あの力をもっているからだ。身体を高め、／生氣の状態、自らの内壁の閃光の状態、力と才能と声の真なる沸騰の状態で身体を投射するという力を」(「ピエール画廊で読まれるために書かれた三つのテキスト」)——そう！すべての問題は、〈別の身体へ〉ということにある。

アルトーのこの後期集成は、まさにこの〈別の身体へ〉の叫びであり、気息であり、これらをともなった声(無限の外部)からなる。これらの集成は、こうした意味で、或るまとまりをもった作品でも、まとまりのないテキストを一つに集めた断章群でもない。つまり、これらは、単に別の存在を主張するために書かれたものでも、現行の存在を単に否定しようとして存在しないものの側から無への意志によって書かれたものでもない(宇野邦一『アルトー 思考と身体』の「存在と身体」と「対決」を参照)。こうした叫びや気息は、意味や価値といった非身体的なものの変形と限りなく反転しうるようなもの、つまり残酷性の演劇言語である。それらは、〈別の身体へ〉を直接に触発するものであり、盛り狂わされた「記号-微粒子」(ガタリ)からなる言表態である。アルトーのテキストは、存在しない身体から発生した生ける痕跡である。言い換えると、それは、「或る身体から別の身体へ」という仕方では存在しえないような身体が有する属性そのものである。

評者は、アルトーをスピノザと同じ系列あるいは系譜に位置づける者である。というのも、この二人だけが、上述したような意味での〈別の身体へ〉を真に人間の臨床の問題として意識していたからである。スピノザにとっての〈或る身体から別の身体へ〉とは、自己の身体が存在からその身体の本質への移行であり、言い換えると、自己の身体が存在上の触発からその身体の本質における触発への転換のことである。しかし、アルトーは、「身体の本質」などという言い方はけっしてしない。アルトーは非本質主義者であり、したがってそれに代わるのが、まさに器官なき身体である。ここには、身体に関する〈非-存在〉の全観念がある。それは、このようにして身体の強度的本性と器官なき身体という系譜学的諸要素から発生したものとしてわれわれのうちでもっとも確実なものとなる。

アルトーには、固有の非論理がある。あるいは、この非論理には、徹底

的に何かを避けるという或る種の減算の論理が含まれている、と言うことができる。避けるべきもの、それは、存在の論理と有機体の感覚のなかで処理されただけの言説との集合体である。すでに述べたが、アルトーは、徹底的に〈存在〉を嫌悪した。しかし、だからと言って、アルトーは、単に〈存在しない〉ことを称揚したわけではない。〈存在しない〉には、実は二つの仕方が、つまり〈否〉と〈非〉という様式がある（これらを区別するのに、とくにギリシア語がもつ二つの否定辞——〈ウー〉と〈メー〉——が有効となる）。これらは、すでにシェリングが提起し、ドゥルーズが大胆に展開した考え方でもある。アルトーのテキスト群は、存在するのであれ、存在しないのであれ、〈非-存在〉（メー・オン）からなる。より正確に言うと、こうした〈非-存在〉を支えている限りでのテキストは、肯定的で積極的な或る実在性とその言表作用とからなる。第一に、この或る実在性とは、まさに〈別の身体へ〉の実在性である。第二に、この身体が発する気象現象のごとき言表作用があるが、それが特異な非論理的方法を有するのである。この方法は、実はドゥルーズによって「対言=矛盾」（コントラ・ディクション）の論理に抗して提起された、まさに「副言」（ヴィス・ディクション）という出来事の論理あるいは非論理でもある。アルトーのテキストには、〈存在〉（オン）と〈否-存在〉（ワーク・オン）との間の「対言=矛盾」の関係を変形する力がある。端的に言うと、別の身体へ、あるいは器官なき身体は、非共可能性を唯一の様相とする諸々の出来事の発生的要素なのである。

副言は、あくまでも一つの方法であり、また非論理的である限り、形式化できないであろう。というのも、副言がもつ非論理性は、身体の受動的な異他の変様=触発をそのまま能動的な自己変様=触発へと反転させうるような力能に由来しているからである。副言が見出され意識化されるのは、とりわけ何らかの抵抗性においてである。出来事を特異化する諸抵抗は、〈否-存在〉に相関するのではなく、まさに〈非-存在〉を支持する連続性のうちにある。アルトーの驚嘆すべき言説がある——「ありのままの自分の身体によって抵抗し、日常生活が要求するなすべき努力を前にしての、あらゆるなりゆきまかせに対する日々の抵抗の意志によって身体を知ろうとすることは、まさにそれだけが、人間にできること、なすべきことだから」（『手先と責苦』）。これは、まさに〈副言の身体〉についての言及で

ある。アルトーは、こうした方法を一つの極限にまでもたす。それは、存在と否－存在を非－存在へと変質させ落下させる過程そのものである。アルトーは、そうした非物体的なものの変形を出来事として発生させる身体しか信じない。身体は、もっとも実在的な〈非－存在〉なのである。しかし、それは、まさに血と骨だけでできた〈非－存在〉、すなわち器官なき身体である。それは、表象の言語や論理だけでなく、物理的因果性が刻印される有機体にさえも先立つような、出来事の変形の身体である。〈矛盾の存在〉は、こうした〈副言の身体〉に由来するのだ。アルトーには、この〈非－存在〉をめぐる思考上の苛烈な系譜学がある。アルトーのテキストは、奇妙な副言についての異様な直観から存立している（この意味でアルトーのテキストあるいは狂気は、言語化も、制度化も、対象化もできないような、副言のもっとも明晰判明な非論理のもとにある）。まったくの非論理的な出来事の〈非－存在〉は、最後には器官なき身体になる。それは、〈非論理から反物質へ〉の身体である。それゆえ、アルトーのテキスト（＝副言）は、つねに叫びと氣息をともなっているのだ。

この後期集成は、まさに器官なき身体から発生するもっとも反時代的な〈氣息－氣象〉である。残酷とは、一つの流産＝逆流する情動である。ここに、残酷の哲学が生起する――〈アルトーにはアルトーを〉。しかし、私は、アルトーを少し概念化しすぎたのではないかと畏れる。

（哲学者／立教大学教授）

（『図書新聞』、3260号、2016年6月25日掲載）

\* \* \* \*

以上が、今回の私のアルトー論です。私は、アルトーが問題提起する身体の問題を演劇の領域を超えた、人間一般に関わる一種の臨床の問題だと考えています。アルトーは、人間の或る身体を別の身体へと作り直すことをつねに考えていました。たしかに病気の身体から健康な身体へというのも、一つの臨床的な問題ですが、しかしアルトーは、明らかにまったく別の臨床の問題を、つまり有機的身体から無機的身體への移行を欲望していました。スピノザも、同じような臨床の問題を捉えていました。「われわれは、この生において、とくに幼児期の身体を、その本性の許す限り、またその本性に役立つ限り、もっとも多くのことに有



能な〈別の身体〉に、そして自己と神と物とについてもっとも多くのことを意識するような精神に関係する〈別の身体〉に変化させようと努める」(スピノザ『エチカ』、第五部)。さらにアルトーには、こうした臨床の問題と同時に、精神の問題も、つまり批判の問題もあります。この二つの問題は、完全に並行論の関係をなしています。アルトーの批判の問題とは何か。それは、例えば、いかに演劇を分節言語から引き離して、非分節的な音調性と結びつけるのかということです。〈別の身体へ〉というのは、アルトーが存在を嫌ったということ、すなわち存在の論理をもつ精神を嫌ったということでもあります。

冒頭で述べたように、哲学は、精神をいかにして変化させるのかという問いを絶えず考えてきました。プラトンの哲学は、その典型だと言えます。というのも、それは、何よりもわれわれが用いるロゴス(言葉、言語、論理、等々)を上昇させることによって精神あるいは魂の上昇的变化を達成しようとするものだからです。われわれのロゴスは、最初は物に張り付いた仕方です。「下」に存在しています。古代ギリシア語では、「下へ」という接頭辞は「カタ」であり、したがって、ロゴスの下向的な使用は、〈カタ・ロゴス〉——カタログ(catalogue)の語源——と言われます。要するに、それはカタログ言語ですね。プラトンは、そこから精神をもっと上昇させろ、ロゴスを上げるんだと言う。「上へ」という接頭辞は「アナ」です。それは、〈アナ・ロゴス〉、つまりアナロジー(analogy)のことです。アナロジーは、一般的には既知のものから未知のものへ向かって類推していくという意味をもっていますが、元はこうしたロゴスの上向的使用を意味していました。さて、どうでしょうか。この考え方は、実際には身体なんてあたかもないかのように、批判の問題だけが肥大化していく過程だと言うことができます。身体の触発も臨床の問題も、ここにはほぼありません。さらに言うと、例えば、ヘーゲルの『精神現象学』、それは立派な本ですが、どれほど画期的でも扱われているのは人間の半身、半分だけ、つまり精神だけです。身体の問題は、まったく考えられていない。精神が変化するならば、それとともに変様するような身体は現実には存在しないのかということです。スピノザの並行論は、実は単に精神と身体とが並行関係的に対応しているなんていう理説ではありません。それは、むしろこの両者の生成変化が並行しているということを肯定するものです。

こうした事柄については、まさにアルトーも同じ考え方を有していたと思います。さて、もう一度「残酷」について考えてみましょう。アルトーは、「残酷」について次のように述べています。「私が残酷の演劇を提唱するのはそのためであ



る。——今日のわれわれは、何もかも低俗化する悪い癖をもっているのです、私が「残酷」という言葉を口にすると、誰もが「血」という意味に理解する。だが「残酷演劇」とは、第一に、私にとって残酷で困難な演劇のことである。そして、上演の次元においては、互いに相手の身体を切り刻み合ったり、鋸を使って生体解剖したり、あのアッシリアの皇帝たちのように、人間の耳や鼻や巧みに切り取られた鼻腔を袋詰めにして、郵便で送りつけて与え合う残酷のことではなく、事物がわれわれに働きかける遥かに恐ろしい、遥かに必然的な残酷のことである」（『演劇とその分身』、「名作との縁を切ること」）。何かを切り刻もうとすると、われわれの目の前に開かれるのは、切り刻もうとする対象に対するわれわれの無際限な分割の可能性です。つまり、もっと細かくしようかなとか、分けるのは一回だけにしておこうかなとか。こうした可能性の様相のもとにある限り、事柄は、けっして残酷にはなりえないということです。そうではなく、ただ一つの残酷、「必然的な残酷」しかないんだ、とアルトーは述べています。つまり、残酷には必然性の様相しかないということです。

先ほど読んだ書評のなかで、私は、アルトーには或る種の〈減算の思考〉があると言いました。その一つとして、今述べた様相を徐々に減らしていくという演劇があります。それが、まさに残酷演劇なのです。われわれ人間は、様相——偶然性、可能性、必然性、現実性、潜在性、現働性、等々——の数が多ければ多いほど自由で豊かだと思っています。人間は、さまざまな様相があった方が良く考えて、おそらく歴史的にその数を増やしてきたんだと思われる。ところが、スピノザは、それに逆行する仕方様相をむしろ減算して、必然性しかないと言いました。アルトーも、まさに必然性のなかで「残酷」を考えていきました——「残酷は何よりもまず、明晰であり、一種の厳格な方針であり、必然への服従である」（『演劇とその分身』、「残酷についての手紙」）。可能性のなかでの言葉や情感をもとにして一つの演劇を作るのではまったくない。それしかない、それ以外にはありえないという必然性に関する〈情動〉(affect)のあり方を、アルトーは残酷と呼びたいんだと思います。

スピノザは、「残酷」を次のように明確に定義していました。残酷とは、「自分の愛する者あるいは憐れむ者に対して害悪を与えるようにわれわれを駆る欲望」のことである（『エチカ』、第三部、「諸感情の定義」）。自分の憎む者が、実は自分を愛してくれていると気づく、あるいはそのように表象すると、やはり愛されているならば、たとえ憎んでいたとしても何とか愛し返そうとするわけですね。言

い換えると、たとえ憎んでいても、自分の憎む者から愛されていると想像する人は、憎しみと愛とに同時に刺激されるであろうということです。しかし、スピノザは、もしそうであっても憎しみが優位を占めるとすれば、つまりその者の憎しみがその愛を上回っているのだとすれば、たとえ愛されているとわかったとしても、その者は自分を愛してくれる者に対して害悪を加えようと努めるであろう、と言うんですね。このような感情は、たしかに残酷と呼ばれうるでしょう。そして、とりわけ愛する者が、憎しみの如何なる一般的原因も与えなかったと考えられる場合には、とりわけ残酷である、と。スピノザが述べているこうした感情は、情緒や情感、気分や情念のことではありません。それは、或る意味でそれに触発された者を超えたような、つまり知性や理性によって管理することのできないような、言わば〈被情動態〉とでも訳すべきアフェクトであり、言わば永遠の対象性をもったもののことです。

アルトーは、何故あのように存在を憎むのか。われわれは、例えば、存在に守られている、あるいは自分は単に実存しているだけでなく、人間の本質のもとにあると了解しています。人間は、たとえ自分の現実存在が多少の悲惨さにあつたとしても、その本質だけは自分を肯定し愛してくれている、とそのように無意識的にも理解しているのではないのでしょうか。しかし、そういう人間の本質や本性に対してさえも憎むという残酷の〈情動－欲望〉を、われわれはアルトーのうちに感じることはできないのでしょうか。このようにして、アルトーが考えている残酷性あるいは残酷演劇をスピノザの残酷の定義から考えることができます。

さて、最後に批判と臨床の問題に戻ります。アルトーの残酷演劇においては、〈別の身体へ〉という移行と、その身体が発する非論理的な、しかし出来事として存立する副言という位相とがまさに不可欠な要素なのではないか、そのように私は考えます。ここには、身体に関する〈非－存在〉の全観念があるように思います。それは、身体の強度的本性を系譜学的要素として発生したものです。ここで言う系譜学的要素とは、精神における非物体的なもの、つまり意味や価値を変形するような要素——アルトーが求めた、俳優の非人間的な叫びと氣息——のことです。

以上で私の話を終わりたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。